

も切れない(?)深い因縁があるようだ。

<2つの『阿片戦争』>

謝晋監督の『阿片戦争』は、1997年につくられた150分の大作だが、実はもう一つの『阿片戦争』がある。これはもともと『林則徐』というタイトルで、1959年に鄭君里・岑范監督が映画化したもので、名優「趙丹」が主人公の林則徐に扮したもの。私はこれをシネ・ヌーヴォで開催された「日中国交正常化30周年記念 中国映画の全貌2002-3」で観た。ストーリーも面白く、戦闘シーンも1959年製作の映画としては、かなりの迫力のものであったが、やはり少し物足りなさを感じざるをえなかった。しかし1997年の『阿片戦争』は・・・?

<阿片戦争と香港返還>

清国の皇帝、道光帝(蘇民/スー・ミン)は阿片追放政策を取り、阿片の没収・廃棄を命じた。これに端を発して勃発したのが、阿片戦争。すなわち、これに対抗してイギリス議会は、1840年、賛成271票対反対262票という僅差で清国への派兵を決定した。そしてブレマー提督(オリバー・コットン)を司令官とする遠征軍艦隊を派遣して、武力で清国を制圧の上、1842年に南京条約を締結。これによって香港島がイギリスに割譲されることになった。その後1860年の北京条約を経て、1898年6月、新界の99年間のイギリスへの租借が決定された。そして、99年の期間を経て香港が中国に返還されたのが、1997年7月1日だ。

<林則徐と恩師呂子方>

林則徐(鮑国安/パオ・クオアン)は、阿片追放政策を採用した清国の道光帝の命を受けて、これに命を賭して従事した、湖広(湖南・湖北)総督。道光帝は、当初、この林則徐に対して不退転の決意を示して阿片の没収・廃棄処分を命じたが、イギリスから攻めこまれて、清国の旗色が悪くなると、事態は急変。林則徐はその罪を問われて、欽差大臣を罷免され、最後には流罪にされてしまうという悲劇の人物となってしまった。

その林則徐の恩師が呂子方(劉仲元/リウ・チョンユアン)。道光帝のお召しを受けた林則徐は、その途中、恩師の呂子方を訪ねたが、



阿片戦争
DVD 原価 元 118AGCA
税込価格 ¥4935 (税別価格、2005年3月31日迄)

呂子方は今は、阿片を手放すことができない身に……。しかし、頭はしっかりしている。阿片追放のため、林則徐が道光帝に召されたことを聞き、呂子方は「阿片は危険だが、それを禁止するのはもっと危険だ」と忠告。まさにそのとおりだ。

<道光帝の固い決意！>

「広東へ赴き、阿片追放政策を遂行せよ！」と命ずる道光帝だが、阿片禁止令を出して以来、109年経っても遂行できなかった阿片の追放を本気でやり遂げるには、よほどの皇帝のバックアップが必要なことは明らか。恩師呂子方のアドバイスを受けて、慎重になっている林則徐は、「近年私は病に苦しんでおります」と述べて、辞退しようとするが、道光帝は林則徐の心理状態を把握していた。そこで道光帝は、林則徐の「病」の原因を次の3つに分析した。すなわち、①皇帝は重い任務を与えても権力を授けず制約ばかり多いこと、②任務を遂行しようとしても朝廷の大臣の非難を浴び、志半ばに終えかねないこと、③皇帝の考えが変わりやすく、見通しを立てにくいこと。まさにそのとおり。そして、はっきりと言わないけれども、林則徐が最も心配するのは、第3の皇帝の心変わりの心配！そこで、更に道光帝が示した決断とは……？

扉が開かれると、その庭には何と、恩師の呂子方が捕らえられて座らされていた。阿片の禍が、道光帝の恩師でもある呂子方にまで及んでいることを知った道光帝は、あえて、この呂子方を罷免した上、これを公に処刑することによって、阿片の撲滅の決意を天下に示し、林則徐の決意を固めさせようとしたわけだ。ここまで道光帝の決心が固いと思った林則徐は、「陛下のご命令に従い、阿片を根絶するまで都へは戻りません」と述べて、広東へ向かったが……？

<外敵の中での改革と抵抗勢力>

阿片が有害であり、これを追放しなければならないことは、万人が認める当然の事実。しかし、阿片によって莫大な利益を得ていたイギリスはもとより、中国国内においても、阿片の密売を行う商人たちは、それによって莫大な利益を受けていたし、その阿片商人からワイロを受けとっていた役人たちは、その権限を利用しながら公然とこれを見逃すという状態が続いていた。そんな状況下で急激に阿片の密売を取り締まることは、当然この「既得権益」を守ろうとする「抵抗勢力」の人たちとの軋轢を生んだ。林則徐は、当初道光帝の権力を後ろ楯に、これを強行しようとしたが、その「強硬路線」が、軍事上勝ち目の無いイギリスとの戦争という最悪の結果を招いたうえ、現実はその戦争によって清国そのものが壊滅的な打撃を受けてしまった以上、林則徐のよって立つ基盤が失われたのは当然だった。「改革路線」の貫徹は難しいもの。林則徐の徹底した改革路線は、結果的にみれば、時期尚早だったと言わざるをえない。

この道光帝と林則徐との関係は、スケールこそ違っても、現在の日本の、小泉純一郎総

理大臣と竹中平蔵大臣のようなもの。果たして、小泉改革を竹中大臣は、小泉総理大臣の後ろ楯のもと、どこまでやりとげることができるのだろうか？

<1997年の香港返還と私の香港旅行>

香港は1997年7月1日、99年ぶりにイギリスから中国に返還されたが、その式典はきわめて儀礼的なものだった。すなわち、イギリスは長年の植民地支配について遺憾の意は表さなかったし、中国もほとんどそのことについて恨みがましいことは言わなかった。

私は、その返還直前の1997年6月13日から16日の間、友人たちと共に香港旅行に出かけた。私の目に写った香港の印象は、とにかく狭い土地の中に、超高層ビルが林立していること。そして、ツアーのせいかもしれないが、期待していたほど食事がおいしくなかったこと。1番おいしかったのは、最後の日にブラブラと出かけて屋台で食べた家庭料理という感じだった。香港の中国返還によって、中国は「一国二制度」になると決まっていたものの、香港の「中国本土化」が、返還後どのように進んでいくのかが、その当時の焦点だった。私が香港を訪れた時には、香港で見られなかった中国人民解放軍の制服などが、ボチボチ見られるようになっていたが、返還後は、それが次第に増えていったらしい。

そして、香港返還七周年を迎えた2004年7月1日の香港では、民主化を訴える53万人デモが挙行された。これは、2007年の行政長官選挙と2008年の立法会（議会）議員の直接選挙の実施を巡って、香港住民と中国指導部との間の考え方の相違に基づく対立が激化したため。香港住民の要求に対して、中国指導部は、2004年4月、全国人民代表大会（全人代）でその先送りを決め、民主化の要求を封じ込めることになった。果たして、香港返還10周年となる2007年には、香港と中国本土との関係はどのようになっていることだろう・・・？

<興味深いイギリス議会>

清国への艦隊派遣の是非を議論し、これを決定するためのイギリス議会での議論の様子は非常に興味深い。第1は、その議会が意外に小さいこと。最終的に、賛成271票対反対262票で、艦隊派遣が決定されたのだから、500名以上の議員がいるわけだが、日本の国会に比べると、その議場は格段に狭く、各議員の前には机もない。議長席だけは一段高いところにあって立派だが、真ん中にある記録係の机をはさんで、その両側に議員が腰かけて座っているだけというのは意外。第2は、その議論の仕方が、さすがと感心するほど立派なこと。議長から発言を求められた各議員は、簡にして要を得た発言を順次展開していくが、これぞ「言論の府」としてあるべき姿と感心。形式に流れるばかりで空虚な議論をくり返している日本の国会とは大違いだ！

議会では、清国への艦隊派遣をめぐる賛否両論が対立し、容易に結論が出なかったが、

この雰囲気を変えたのは、阿片商人デント（ボブ・ペック）の発言。これはいわば、日本での「参考人の意見陳述」のようなものだが、自分たちが今置かれている苦境と、中国という国の本質を実にうまく、説得力をもって議員たちに説明したため、僅差ながら、遂に議会の意思は決定した！

＜阿片戦争の「仕掛人」エリオットの策士ぶり＞

チャールズ・エリオット（サイモン・ウイリアムス）は、駐華商務監督。つまり、現地広州でのイギリス人の最高責任者だ。今、西洋商館内の広間に集まっているのは、阿片商人のデントたち。彼らは林則徐による阿片引渡しの強硬な要求に対して、応じるべきか否かを議論したが、その結論は断固拒否というもの。つまり、強硬派が主流となったわけだ。そんな中、エリオットは、1839年3月24日広州に到着した。そして、エリオットがデントらに伝えた方針は、何と「阿片をすべて引渡せ」というもの。そのうえ、「全員が広州を離れる準備を進めろ」というもの。これを聞いて、怒り狂うデントたちだが、エリオットは断固として自己の信念を主張！しかし実はそのウラには、エリオットの深い深慮遠謀が・・・。

＜阿片の処分方法は？＞

林則徐からの阿片引渡し要求を受け入れたエリオットの決断により、処分される阿片の量は2万2千283箱という膨大なもの。ところでその処分方法は？

私が事前に得ていた知識では、これはすべて焼却処分するものと思っていたが、そうではなかった。その方法は、海辺に人口池をつくって、その中に阿片を廃棄したうえ、そこに塩を入れ、次に石灰を入れてかき混ぜて中和させ、そしてこの中和された黒い水を海の中へ流すというもの。こんな方法がベストなのかどうかはわからないが、後にも先にも、こんな大量の阿片が一挙に廃棄処分された例は存在せず、前代未聞のケースであることは、まちがいない。

＜ブレマー提督も知恵者＞

阿片を引渡した後、食料も水もない中、孤立した状態で、沖合の船の中で、じっと待機するエリオットたち。彼は、いったい何をしようとしていたのだろうか？エリオットは、デントをイギリス議会の説得に赴かせて、遠征軍が来るのを待っていた。もちろんデントによる議会説得工作が成功するかどうかは不明。しかし、エリオットはその成功を確信し、それに賭けて、じっと待っていたわけだ。このように、林則徐の要求を受け入れて、阿片を引渡せば、イギリス本国は必ず、その報復のため艦隊を派遣してくると読んだ、エリオットの策士ぶりは相当のもの。

他方、清国遠征軍の司令官はブレマー提督だが、彼もかなりの知恵者。林則徐が固める

広州の備えが強いと知ったブレマー提督は、ここで攻防線を展開すればイギリス軍にも相当の損害が予想されるうえ、政治的意味がうすいと判断。そして、ブレマー提督の決断は、広州を無視して天津、北京方面へ向かい、北京の紫禁城にいる、道光帝に直接プレッシャーをかけようというものだ。さすが、7つの海を支配してきた、当時の最強国イギリスの遠征軍司令官だけのことはあると、その知恵者ぶりに感心！

<浙江省のまち、定海の運命は？>

天津に向かう途中、イギリス遠征艦隊が、水と食料の補給のため立ち寄ったのが、浙江省の杭州、寧波の近くにあるまち定海。これは、表面上は水と食料を渡してくれれば、カネを払うという紳士的な取引だが、抵抗すれば攻撃するというのだから、事実上は恐喝そのもの。そのため、誇り高き清国の定海県知事の姚懷祥は、断固これを拒否。その結果、定海のまちは・・・？もともと、字幕によると、「1840年7月6日定海陥落。阿片戦争では清国の武官武将は・・・一人も投降しなかった。自殺し、殉国したものは数百人に及び、定海県知事姚懷祥もその一人と史書にある」とのこと。

<動揺する道光帝と台頭する和平派>

イギリスの近代海軍と近代兵器によって、何の抵抗もできないまま崩壊した定海の状況を聞いた道光帝は動揺した。もともと、その「林則徐は何をしておったのだ。内なる阿片の害を取り除けんばかりか、外敵をも阻止できず、悪い知らせが絶えぬ。林則徐は大清帝国と朕を誤り、天下を危うくした」というセリフは、あまりにも一人よがりだ、これでは林則徐がかわいそうというものだ。もともと、何代も続いてきた清国の皇帝だから、わがままなことは仕方ないか・・・？

また、林則徐自身も、「当初、私は天下の大事も悟らず、井の中の蛙でした。世界に強国が立ち並び、戦禍が迫っているのを今頃知りました」と反省するが、これもちょっと遅きに失するというもの。もともとこれも、当時の清国の情報収集能力や知識水準ではやむをえないものかも・・・？

日本の明治維新は1868年だが、1840年の清国での阿片戦争を学んだ当時の日本の長州、薩摩を中心とした若者たちは、日本が清国のようにならないため、必死になって西洋の知識を取り入れ、日本の近代化を進めていったのだから立派なもの・・・。

それはさておき、道光帝がこのように動揺すると、そこで台頭してくるのが「和平派」で、その筆頭は琦善（林連昆／リン・リエンクン）。林則徐が欽差大臣を罷免された後、欽差大臣に任命された琦善は、和平交渉の場でエリオットから、①阿片賠償金としての銀6百万両、②5箇所の通商港の開港、そして③香港島の割譲、を要求された。そして、琦善はこれについて、何とも屈辱的な外交交渉を・・・。

<紅一点蓉兒の悲劇>

この阿片戦争という、一大歴史絵巻、大戦争スペクタクルの映画に登場する、紅一点が蓉兒。蓉兒は暢春院の芸妓で絶世の美女。阿片商人のデントから強引に迫られるが、蓉兒はこれを断固拒否。こんなストーリーが冒頭で展開された後、しばらく出番のなかった蓉兒の次の登場は、この屈辱的な和平交渉の場におけるもの。そしてその役割は、清国からイギリスに提供される酒池肉林のうちの肉の部分。すなわち、人身御供だ。和平交渉が行われている海辺のイギリス軍野営地には、琦善大臣が提供した酒や料理による酒宴が終了し、ここはエリオットのテントの中。今蓉兒がエリオットのテントの中にいるのは、「この娘達は体は売りません。彼女達を返してやって下さい。私がお相手を」と言ったため。けなげにも蓉兒がエリオットのベッドのお相手をつとめるといふわけだ。ところがその蓉兒は、着物を脱がせにかかるエリオットの間を見て、いきなり刃物で切りかかったから大変・・・。

コトは失敗し、和平責任者である琦善の怒りをかかった蓉兒は、当然国賊として極刑に処せられることに。あの美しかった蓉兒の顔も今は血だらけとなり、首には板がはめ込まれていた。そんな蓉兒に対する極刑とは、背中に大きな石をくりつけたまま、海の中へ放り込むという、むごいもの。「おじいさん！」と叫びながら、海の中へ沈んでいく蓉兒・・・。

<道光帝最後の大決断は？>

香港島には既にイギリス兵が上陸し、イギリス国旗を。そんな中、北京の紫禁城の勤政殿の中では、大臣たちが口々に道光帝に対して意見の具申中。その意見は、香港島の領土割譲を認めるのか、それとも開戦するのかの2つに1つ。そして、道光帝が下した最後の決断は、開戦！さあここに、香港島の割譲をめぐる、広州の虎門において、本格的な戦闘が開始された。しかしその結末は、火を見るよりも明らかだった・・・。

<滅亡の途を歩み始める清帝国>

阿片戦争に敗れた清帝国は、結局は力づくで香港をイギリスに割譲させられた。そして、欽差大臣をつとめた林則徐も琦善も失脚することに・・・。

映画のラストは、道光帝がたくさんの皇子たちと共に、紫禁城の奉先殿において、歴代の皇帝の位牌に何度も何度も頭を下げてお詫びするシーン。しかし、こんな対応しかできない清帝国だったからこそ、近代化した西欧列強に対抗していくことができず、その後、中国が列強の侵略の舞台となり、清帝国の滅亡に向かっていくことになったわけだ。考えてみれば、日本の浦賀沖にアメリカのペリーの黒船が来襲したのは1853年だったから、この阿片戦争のわずか13年後のこと。よくぞ日本がこの清帝国のようにならなかったものだと、この映画を観ながら考えたのは、私だけではなかっただろう・・・。

2004（平成16）年7月13日記